# 俳諧一葉集

一

邑蕉翁裔可附合文章茶話俳諧遺法消息也一代之風藻雖不可考然所謂親青於古書收藏於他庫也悉以擊焉

# 俳諧一葉集

前後篇九冊

東都中橋北槙甲

一具菴藏梓

序

俳諧者非常色而中格妙門也世人妄謂一時戲言綺語也豈支然耶蓋能致知而達理之常變氣之順逆固守自得遊心於太虛則語默作ゝ無有不善故

棄名利而遊之靜安可獲焉誠
意而為之身脩家懋學不外乎
此矣昔從芭蕉啟西風雲從風
靡今雖其流間有淆者泝源者
亦不少也屬者社友集錄翁一
期所嘯以為小冊以便卷懷可
謂夜行珠矣傳曰法不自顯弘
之在人湖子其人乎是為序
文政十癸歲四月
仙波僧正書于蒼蔔
林中之谷神齋

# 俳諧一葉集序

花千かくうくひすの玉姫のあくをきけば
生とし生けるものつれの歌をよみうけるとこの和
家千きく人千よ年を詩と俳諧とにそつうまと
ふうくしそもし芭蕉庵松青苔八三十はまうは
ゝうまう俳頂稽ゆ千つゞて発揮しまるひをうこ
花月の故郷と俳諧の座をきゝ深して七情よくハ
為ひをたふふ代くう外く渾沌を活して性を
古人千と代ゝの雅風を物して古今集の大ゆの

歌子ゑと杜仲山家集の稿をあつめて自
序の初をけしめて狂句子弟外の酒資を送り人
情を述ぶ千章一文章紀行紙子をへさ弟子
道の称とゆふるれるふ世生ゑよう四海とあふ花
る丈とを知さ称棒郎と桃まさ稿す門弟
子國三千ちして千風を号ふ人幾ましいふ
数をしるる述るれると庶を春と男をあふい
大言子通ふるれ称ほのふて予斗賞の量洩
子述去子生れ師友ふもくけう社いかとれ



出ひとを古学者とはうて祖翁の一巻子ふち
ますを社し物を世右ふし尚を巻子ふ述くを
と受ふ千と嘗ふふ消息述の志けきふ恋ふし
ゆく集めて只ひとつ巻の一といふ子ちふひて俳諧一
巻集と題し板され世をとふふとかれ行
古述子西ふと非ゆう見ふて村肝をきさ
みさゆれ舎を道雪子つとれ三手ましふ
いふ旅子ひとつ巻ふ友人坊富の函底をふめふ
金ふと称ふふふ称れの沸子はまて大事は

ものを書さんよりハまづこの世俗境に入ておんすれハ
つゝさい人の心法を指さいゝつゝ自然を求る水を
遠き水をちかくとゝ俗を切捨て一生を先利に
あやまりて求るをけれども俗法を勉て来て俗法を
こゝろ捨て其のちに俗諦をいとへとゝ来る
乃詞をつゝてこの世の物語を書

文政丁亥仲秋　　四辟老湖中

凡例

一我国の邪宗文延寛文和時代の分ハ四季ともに
帖のはしめ五月夏事元禄の分ハ春秋冬事を出す
毛詩をもつて義季の分ハ発端を出す
一同物語き書を尺とする句或ハ行脚の伝或ハ俳友落
句伝ハ古書を所尺ふる事ハ物語をもつて
ゆれハ考ゆるとして手摩しの書ハ載
一附合の句ハ延宝よりこの元禄まで年歴をしく
次第一さ和歌一書の伝りをしるす

一同二句三句或ハ五句七句見の物ハ手帳の末に載

一同古集なるを寛文中ハ宗房と号し延宝天和に至て桃青或ハ芭蕉と号し貞享よりハ翁と号して従て是に倣ふ

一文の部石印の頃ハ不猫跡に越人の此等なるにて明らけし然るに梨なく書る牒掃の従翁の作なるもの輯に然れとも文集に漏たるもしハ入れハみたりに省に拾なけれハ末帖に載

一文混合しけるハ辞説録のたくひのことにいへ紀行なとの中に在て短なる句ハ精なる故に文輯に物を志るして記さ折人の老を見るへく

一遺語の部ハ祖翁の語ハさなから一時の戯れにてもなくなし祝すへき志のひかしに属

一同句の並ひれみしのく此書にハ長くはりもの手大同小異を和千般きんへもけかりあれハ重複なから載

# 俳諧一葉集 發句春之部

古學庵佛考
幻窓 湖中 編
坎窩 久藏 校

寛文延寛天和季中

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

もてはやつる是を手玉らうろ玉

梅　春々大丸　哉春と云　〻

えの句歳旧の子　梅

餅をいはう手打諸肩衆の子　梅

季吟　勅撰中古

和歌の詠とふや生ちかの八きくまみ

叶梅手生ま〻　神言と好り色し

古ぶの梅や　嚴　波の二年　哉

梅うや志ら〻おちくふ京右卯

志ほ手ま丸風とすうぬ志の弱

梅　梅　まそて若京うれ女うふ

杉風寄句

さ〻けう〻二月中旬名川菊子

き手ハ〻や　そ〻く　すま社よ次郎月

和らの毒へつひの扁れまかうひう

蕚ま〻す〻白魚やとうハ消ぬ百ふ

石川加餐生の今年山店子香佐れて

腐てんとうと芹の飯ぬ名て保川ま

杉手ま〻れ青泥坊庵の芹ま四ぬを

千代の俤ま〻の子おか池

香ら色の　郭　浦　跡す芹の食

少しまんや蕚ま芹焼をんてま粉

さうれう梅手すて引風ま乳

梅咲や白の　梅本のふ如う

竹内一枝折そへて

春ゝ自へ梅花一枝のうへさゝぬ

ゆゑ事風和面しさゝく梅鮫

餅をしらるゝ事やあるか

ふひうん菩提の絆を解なられ

志ゝ魚子價ゆるこゝゝみあれ

菅掘さ貧ある女樣子よ体

内裡雛人形天皇の御宇とうわ

若所八体の内二ヶ

貝よりまる風のまさるあわ和泉の浦

狭石ゝ事面ゝゝるきゝすゝ

掘けんや事を本枝の結もしゝて



山吹の花の笑のたのかゝら良あるや

夏文知酒聖貧始覺弥神

花ゝうゝ世系酒さゝく食寒し

雨降ゝれハ

学展の風折て降ゝむ山伏ゝ

笠の影ゝさけてゝゝあ紙月

花ゝ雑の月ゝ尺ゝ思蔵

ゝゝ山やか掘ゝ花の志さゝ

箕の先ゝ也吹さゝ梅海苔

紅毛ゝ花ゝ来ゝゝ事ゝ鮫

蛇樣吹やゝ也ゝのおゝひゝ

糸さゝゝゝわ降ゝさの見もつれ

吹風に尾花なびくや大さとの
艶なる姿もたゞやはなの春のさま
文をしる　千
和漢朗詠集
うゝんなる人やさくらぎ山橋
花のもとゝ雲白雪ふれ積て
帯すゝ物ぬるゝけきや春の雪袋
雪風に吹出し笠ふもとのふ
やしの花や春三郎のよしの山
てきちらすゝ雲ふ来るやもたゝ海
和もすいのちも七十五年ほと
はゝ〜や花ゝ雲ゝ雲ゝ法ぬゝ春



元和や宜物ゝ尺八千もの重
家元万丸釋集の花尺ゝ
氏ゝ生ゝ生ゝ生ゝ春の梅
道雪の時
ゝゝ尾ゝ行友ゝ春紅ゝ
李白芭蕉ゝ
ゝ銭樹ゝ先ゝむ萩の二葉
貞享元禄年中
ゝ三ゝ新手　古ゝ宋五升
尾千ゝ
いゝ千ゝ芭蕉の松ゝ

山家遠き

後堀河の百首第千 俳諧和歌

伊勢の国 家も木ずゑも代の哀

嵐吹き うき雲 四月小袖を見てしれ

後中務の姿あり 似るものもなき

雪の降波をしまんと四方の木ずゑ

海無しの うきえりの屋ずゑ 山ゆみ

初の月 ちぬ

二月十日ぬ はをしれ花の哀

角の如 角のほうてしれ八の俳諧の

ちちちちちを をてを

歳 ちちめ ちれ 色かを

京にうそ和子 事をとうて

こを紙 見てうれ人いをうをの

御所の 雪 屋子 事をむうふ 三

なりを 月 雪 四

大津絵の筆の はは 色八何 俳

人と人ぬ ちを和 絵のうう 北 物

事しや 様子 見をうさうの 面

えうえ 田 面のなうう 色しけれ

蓬 茅子 ちを和 伊勢の 和 俗

ちうし に ちく ゆうむ 友 ちう

古 物子 蓄 揺 ゆく をうう

一 ちを子 一 度 つ八うう 蓄 う 歌

翁翁千とせあるべき春の初めの蓬が
風麦亭
まさしくやさしきされる社頃山こうれ
大ら枝やしら社まを引て一うきみ
まきあれや名もなき山の新蕨
西角もあみ沈と近江や関 角
うくひすの竹を蕨しうる結うる
あ丞すうし
青ちすす楚ゆる竹れさやしれ
雪や 梅のうしる藪の 春
うくひすや鶯よ巻すう梅れ先
ある人の雪の戸と言ける

紅梅の咲ぬる色つくるまさらに花
梅ぬすびて樹下やとふ夜の南
山里は万葉集をし梅ぬすび
家良
昔人の心をしらるめの糸
卓袋亭月待
月やたちや樹のしたゆく小山伏
山家
手洗うむ手さへ梅の花伏うゝ外
伊賀の山家
うゝみとふ物あり去屋
ち浮もれし蕨とも石ゝゆふ
本ゝあるに異色ゝもあり



高あくまの高みを梅野也ゝ
て白木綿ゝ石家ゝ物ゝいゝ
伊ゝ此ゝ月ゝの梅ゝ
めつゝ

高千穂
一ゝを梅の花ほゝ
ゝ梅の花
ゝ伊の伊ゝ知人ゝ
此ゝみちの形ゝ尺ゝ
高ゝを訪ゝ
又ゝ
ゝ数の中ゝ梅のゝ
伊賀ゝ
おゝ良ゝ

細代氏新宅に梅を植て
樹の本すゑ多和やうに木和梅の色
里のなよ梅の物を生乃歌

園女亭

咲蕾のかたくまじりゆうし小竹梅

乙州に来武行餞会

梅さくの家さうらの梅のとうて汁
もてやうきとうのふ有と梅
かうくまぬかうきしの梅梅

去来に送る人のうたいとつ
蔦葛のさしみさうし梅の本

仙葉射八幡の二月会のうらを

一国名の所とて父梅九子より丈へ
うしへう

梅の色にもうしは一字あそ結し
うめうすの川とものもうこ山後うれ
年すすむく梅や花のようこ後
蕾まとよ人のうしく木の枯く
迎るや梅うしてもつてむ

二月去来に見梅の判撃を醫
門に入を賀し笑ます

初午に狐のそ宮——て盗小
仲勢うて
祝頃や物ものうけ祝そ人像

貞享五とせきさらきの末伊勢に詣つ
此御前白洲の末を踏こと既に五度に
及ひ侍りぬひとつしらのくはゝれる
まゝのひかけもくもりしさおほえ
光りも迎ひすまれる宅御しかの西行
法師の涙をしたひ増賀の信を悲
しみて内宮の御前におそれぬかつきつゝ
扇子砂にはつかしくて侍る

何の木の花とはしらす匂ひ哉

裸にはまた衣更着の嵐哉

嗒山旅宿

陽炎の我肩にたつ紙衣哉

陽炎や柴胡の原の薄曇

伊賀新大佛寺

丈六に陽炎高し石の上

枯芝ややゝ陽炎の一二寸

野州室の八島にて

糸遊に結ひつきたるけふり哉

入かゝる日も糸遊の名残哉

百草や杉の木末にいろみ草

木曽の情雪や生ぬく春の草

雲雀より空にやすらふ峠哉

二月堂

水取や氷の僧の沓の音

佃淑まし

春の野や薬人ゆかし雲の陽

春風やきゝらくゝへて紙硯屋

奈良にて

春風や人あつまりて三笠山

笠寺奉納

笠とるやもらぬ窟も春の雨

よし野雨竹庵二句

流るゝ筆に汲あまし清水の水

春雨の木下につたふ雫哉

くる雨や蕨をも伸す草の花

赤坂庵にて

不精さやかき起されし春の雨

春雨や蓑吹かへす川柳

春雨や蜂の巣つたふ屋根の漏

在京寺にて

しら浪や魂に絶ゆ燕柳

猿蹄に對して

もろしのこゝろ柳に老の子くし

古川にこびて芽をはる柳哉

吹ちりて蝶の羽まるやまきぶ柳

野杜國

笠の緒に柳つゝめる旅もなし

終日にさはる柳のたまへかな

かくのごとき柳しげれる様の寺島
まの西に七河のほとりやなぎされ
さうれなきを数かる柳見えけり
千本あまりかこみたる中に満ち以
ちとをやみふけれハ
八九百本も有律り植えられ
蝙蝠もいよいよ其花のちりける
世にきこえし念仏やの
誰かたれかいつまでもかのやうに
寿命は七年七年伽藍八重様
訪ひし隠
櫨の木に花まがへぬすみかな

昭和蛸郎
かかる紀の杉をもとむる所なる
逢古人
有ふる河の中に浮かべる桜の気
山さらに見えぬもの気色なる河
異域門と妙音四王天の紫苑も
られてむかしおもふ人のよもすがら庭を
河原をもとめし西照信仰のうち紀氏を
過ぎし苑頂山ましのこの木の本
新色枯らし錦の林中をし思ひ出でられ
てゆきし
観音は葛尾ふりつもるのを

七夕の七ツ七尺の物語

物語自歌

花ちる山ふかれてひそ友雁
鶯の巣とくらしもの紫ゝ

雪流

花の雪 降て上野の陸奥の
はなはハ橘木とその和谷の赤木のいと
とゝ物ゝきのふハ雪もとて塑ハ
赤ふ流ふ生ふ一樹の色のしいのか
手ゝはなハくしといいとくして弱手
奥者の淺をとけぬ
きしゝとやゝ赤みはゝとれあまふ



伊賀の上野なる和會
とゝの撰ゝしもくゝゝそよゝ
笑みゝす 桜の井ゝ和伏ゝ
京清ゝ花尺のゝまゝハ七ゝ清
拾九ゝのゝ壁
ゝゝしのゝゝゝゝゝひゝゝ撰このふ
鶯竹流ゝ絵ゝいれゝ松の奥いとあ
ゝけきハ
花ゝゝ和ゝは清ゝやせゝ
回亭ゝ流ゝ松ゝけゝ
世伊ゝ流ゝとゝ乱いふわゝ乱
ゝゝのゝゝに寸付ける

芽出し　櫻尺きしろひの本堂

詩門二句

詩門の花和上戸のちまきん

酒のうまかしむこうる　酒の花

櫻　特きしくやうまう五里　六百

芽出

花さうう山そう酒の名ほうけ

きうくうくハも　の上ある有数外

花尾村うし

花のうけ　塩ひう　似うる　ねうる

大和むをひ師　し蕎麦の禁をとう

ようの　むハ　まうし　ハかうしうる

嘆のけきいうし　数あううかの神のみうさ

ち更　人のはさうふくうさ待くはんい

数尺うし　花うう　ものけ　ぬく　神の色

文者う　来行　俳句

此うう　接をよ　もう　五　五　一具

尾法の門人ようう法酒一樽　木花の樽

法菓一鉢おうう

むうう　けうを　人くうう

飲　高　ケ　花いけうきる二升樽

花の和ハ　櫻ケ　ゆし　志ようう

花尾ようう　櫻うう門人ようう　角鼠　花うう

高かようう　櫻と　仕うう　や　花の　俳

宗阿人

まつり飽とや人ハそれ花やかし

蒲山の雲にて桜雲か画し游の鏡

其もやまさおとろく春の花

依や吟般お

都の毛みくろおるや花の雲

露隔さすまかりて

西行の詫とかしお花の庵

良き似ぬ背旬とも御さかう

百年くの文よ

しつやかしられ寺の小松山桜

嵐山



花の山二丁のほれハ大悲閣

言申ます保川の旅なと初

めてまさす舟のし　柳原

さくらとハなにと宿やるきめてもす

解ぬ声のあはれさろよ

花やお宿ぬかれともふひの嵐の家

上戸のもみすすのう仕うしに人しし幕

おさわき物の音小唄のあうきれし寄や

それうかさえうの松影ともみて

よけ正点ね桜ハぬ花見らくろの家

古番や花お桜如の粉ひまや

都よくハうかえんものを桜ちる

降きして　もの[illegible]
山家
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]
歌[illegible]の[illegible]
二尺の図[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]亭
[illegible]
伊賀[illegible]
八幡[illegible]
一里[illegible]

扁[illegible]
似合[illegible]
[illegible]寺扁木[illegible]亭
[illegible]
本の[illegible]
海[illegible]寺
四方[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

上総國

海そなりて小山作あり山桜

古郷のみの國中とこの辺を

まもる

まこもや二ばかりまえる苗なる辺

はるかなる里ひとつ里ひとつ

年経わ花の咲ける千実なるく

木白鳥り

さくらけ方ふるわ桜林

佛見薬寺

秋方千 佛見ふれ桜の下をる

ゆくへ八幡 ふるる 桜のえ

尚白と浪華へ下る

只一枝 櫻千 わかうる 木 情の外

古寺の 櫻千 第ものもをとも

舟出 もやもう対あく 信の桜

さくけ知の 花やひやうもいる

心千さうるものむりうれハ

多須住る庵をおもれる人を遠て

如何人多人等を異むるを

持る人多を発ハ

筆の戸を住る代を新の 春

重三

青柳 五泥千 さくる以千 ゆ

おとろへや蔦手に成てし海苔の秋

老懶

蟬よりハ海苔をとハ老の恋をとる

海苔手習の海苔棹

海苔汁のまぶ隠尺をとる一寸

あけかのやうに白魚をとる

学陸下向手ハ射迄の人々

ひかのまぶれ白魚迄あわう絵ハ

坂子図説

走るをやぶ黒ふ見をなく法の図

よ野をとる舟

飯貝や雨手海ふて図ハ中

古仏や雛ハ孤こもれ

雛をる見ふる鶴を信ふ

ふるふをれやふみつまく猫の恋

田家

麦先手やつて走る猫の妻

猫の恋牛をる闘のおもる角

膳所八角人手射て

猿のまつ尺てまるよ猿かの裏

山猿来て仏やふるまれ子

悼呂丸

当時ふる表の墳のすみ色例

よく尺花ハ芸也咲かきるのの糸

圖角屋の濱を望む

なほ見ぬさまよひみわひうれ

苔堤山

山寺の少しき苔よ堤を堤

堤ものの千梨の接穂や山屋き

菓店二句

作しいけてせうけて千能さく女

業とけて千も見ぬる雀の面

陳菴の信宗波旅千起れをを

古業只あれをれる隣こうを

京中や知る千も つる千傳や雀

ふのもりも特しぬのをれ

をを結ふたけ体ふたけ

ひをを傳中の物あきの

言結し

父母の志をを老 結をの布

世ををきけハ知をしきの

嘆をりを嘆しをを傳 蓋

雀をを知をを氣の業

業子画讃

もろこの似絵 恥 楽

物あや自ハぬををを 楽

布木亭

時の初秋いを度ゆる 蝉の石 松

走よし秀英を家の[illegible]

画讃

[illegible]山や虹とくく[illegible]

西河

[illegible]山[illegible]の[illegible]

画讃

山吹や宇治の[illegible]

山[illegible]

大和り御の[illegible]丹波市とゆふ

[illegible]

[illegible]

二条殿

義[illegible]門[illegible]

逢就尚舎

物の[illegible]先[illegible]ふ義の[illegible]

[illegible]

[illegible]

行春や[illegible]一魚の目[illegible]海

四家[illegible]

入あしの葉ぬきうちはらひたるの心れ
ぬ里のそのゆきの大くの景
京洲水惜
ゆくまくをしたの人とをみる

秀哲
ちる花を陳の梅をわすれゆく
自題自賛

[illegible]
上州の産
[illegible]
孤名のみちみち行を送る
むく起て陳のもおもかちひの角
温和尚を悼
[illegible]
[illegible]
[illegible]

精靈

まつりは流れ落して古き藍

怒鎗に突して納まる筆の心譜

まつりけれは

君や膝香や茄子かいさゝし盆

新渋の香最高佛頂禅師の小庵

をなきて

あらそ不来て棚さのしまる夜の蚤

発句夏之部

寛文延宝より和年中

時鳥やなけ耳のすゝむる絵ときは

野辺も ゆく 万麦 秋も 尾花

日まで匂ひ油月桜れおとしまは

戸の日手向れなのれ郎ら

黒燒釜をうて粽ゝ偲とまは

走はり見きまつ 偲とき ますゑ 季

子規 正月の 梅乃花さくり

清く 労む 耳 半魚 蛸 それ 郎ら

岩洩らし 浪る 流や 偲 とく き 朱

菖蒲 生 打の いゝ し 〻 鶴 議

見すくく荊をつゝむほたるかな
蓮の葉似よりや似たる雲の影
時鳥つかまる枕は海士の袖
五月雨の雲棒桑の翠につゝきけり
さみたれや何物壱や月に魚
涼しさや舟をすゝむる梅の雨
五月雨も瀬ふみ尋ぬる見なれ川
さみたれや龍燈あける番太郎
さみたれや蚕煩ふ桑の畑
こゝも三河むらさき麦のかきつはた
楼の濱や跡ふむ塵の無縁風
右ハ八体の内 二句

秋や頃ふ廣や秋しる妻の秋
汗をやよし沖の夜の山伏
夕かほや尺とまりや白きのはなん
ゆふ顔の白く夜の後架に紙燭とりて
松風生なりけるの寒調して
鶯くりはれハ
いてや我よき布きたり蝉衣
雲の何ぞ龍を覚月の鯉
美しきをしめゆゑや庵さくら
落柳よろしきたる先きかみ
闇き梅杯下そふ玉霰
枯ようねす蓑の蝶のかけ

小松の中山にて

いのちなりけりさらぬ別の道の下草

不ト の母追善

あもけさ法ときいとくの花の香

甲斐文の祈願にて

社善吟

立てるかたしも我を絶て天にうかぶ

東京文孫寺中

ひとりの秋てらしあはせる更衣

立ぬまてもはひとり樂のひとくうれ

高良にて

清佛のなきをまれゆふ鐘のこの寺

清仏や鼓を金にする珠数のこゑ

祐親寺

ちとせ樂一とせ月の雲めぐるや

日光山

ゆらゆらかとまち樂わるくのうち光

書尺の滝

志ほくくい滝ゆ義わるの滝ぬ

神ひめ木蓮や四月の花ゑ物

甲斐大山中一百

山雀の鳴 月 あ 雀 う 寺

ゆく弱れ麦千あくまむやとれ

[illegible]

逸素門

[illegible]

五月十日武蔵[illegible]

入くしの時やもしら[illegible]

白をゆふ世の[illegible]

[illegible]

[illegible]

悼大巓和尚

梅[illegible]

世間の毋五七日追善

[illegible]

[illegible]

[illegible]

尾張より東武下る時

牡丹蕊深くうけもち蜂の為ゆゑ

桃隣新発句画賛

[illegible]人の花の蜜

大坂にて

[illegible]

山崎宗鑑居[illegible]

[illegible]

[illegible]

鳴海知足亭

うかつさと我千歳ゟの初山ゆり

帰華

あらいそき風をとり盡さは
てられと内室まてさけて友朋識
大領の誹を君　日光御代参勤をを
ゐふ千慮従ひて宮田何某ゟ寄
篠の露篠よくの計し　歳くの尾
嵐山藪の茂りや風の筋

波鷹

ほとゝきす藪の蔭きく木下雲

雲岸ち

木つきも庵ハ破らし友木立

幻住庵

先たのむ椎の木もあり夏木立

別旧友

二やさ子乃木刎れ出の角
子規啼や黒戸の濱庇
橘やいつの野中の時鳥

須磨浦にて　二句

須磨のあまの矢先に鳴や郭公
ほとゝきす消行方や島一つ

裏見の瀧

暫らくはうらみの瀧の裏初て

みちのく一見の桑門同行二人那須

蓼科会

柳のもとに昔をもとめ侍の句

芝芝やすらふ

うへうへと樓や雨に花くもる

白什一や財白の赤の咲つゝあり

鶴杜園

白きしに羽もく樓のうみれ

次慶

海士の兵まゐうやけの赤

岱水亭

雨ぬれし異ふるもとめ侍

芦蛇

同一枝植うたら生植うれ

美州会の志し川より出ニ

雨のひゝうゝ山より出るも風の志

平昔うも赤ゝ色ふ色ふ敷の雨

みちけくよ名和しやる迫とうし光蘭成

の紅まつのきまする山ようて合

社白川もこゝぬ桜ゝ岩瀬歌ゝ出ゝ作

單齋雪好るの芳屋を都かの陽関は

ゆゝ故人ゝ海ゝ

風流のこゝ——めやたくの田植哥

志のふの歌思ふの里ゝのやゝ文ゝ柳の長話

とゝ方二ゝ方ゝ百ゝ石八昔女の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

尾張の田文や[illegible]

[illegible]代[illegible]少国の[illegible]

荒田代の亭

栄つけ[illegible]の[illegible]や田植酒

屋[illegible]

[illegible]

本吉郡の船[illegible]大[illegible]

[illegible]田の[illegible]

[illegible]田毎の[illegible]

上林三入亭

[illegible]尺や樽[illegible]郎酔て[illegible]れ

[illegible]の[illegible]大[illegible]本[illegible]の[illegible]の[illegible]

秋[illegible]村[illegible]仕[illegible]

[illegible]為[illegible]蛾の[illegible]ちひ[illegible]を[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

蝸牛角ふりわけて淀つゆかし
伴ふ木曽路千里の附 二句
しれ人の旅しもよく木曽の蝶
樵の老もゆう綿も似よ木曽の翁
扇子の山家
昼ねしてみ手の扇をまくらもと
清風亭
大ひなる山庭よりの広さの庭
竹の子や稚ふ時の絵のすさひ
小錦堂
しまうしや筆しをり人の果
伊勢路より隅田川の花をとふらひて

大きさや竹の子数々志かし峰
木園亭竹睡
咲きしま竹 根をかれみのとき
竹陰舎
香の人乃尺つぬ花や舞の袖
又うちむ小袖の中にも川 松魚
うきも音にのする人をわすれすむ
頭巾きいしも むきん頭 松魚
やみの夜や常をおとして心中すゝ
志ら川より行伝之文をつの上すはる
年ならぬ宿なしの餅をかとへるもの
大津湖仙亭

此宮まで参詣せしぬ所こうちま
ゑ門ゝとまのゝ仏谷まで送りて
仏ゝ信士宮ゆゝ浄ゝかゝ寄ゝ
ゑ経唱ゝ人のゝゝゑゆ仏谷信
武隈の松ゝ
桜ゝ松ゝ二本を三月越
みゝゝの花や新後の新は耳ゝつく
信ゝ手いゝふゝくれゝゝ月四日吉家
求ゝゝゝ尺ゝ五ゝゝゝゝゝゝ
見ゆゆめ一枝ゝ枝ゝ桜ゝ
菊ゝ
ゆゆゝゝゝゝ仏ゝ新ゝ雑の法



ちゝゝゝ新ゝゝゝゝゝゝゝゝ新数
病中自嘲
数生ゝ宮新ゝ五月雨
ゝみゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゆゆ武隈川の水源ゝ
五月雨ゝ流隣ゝゝゝゝゝゝ
醫王寺ゝ
茂ゝ左ゝゝ五月ゝゝゝゝゝ仏幾
茂中ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ宮ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]川と五月のめうを見
[illegible]
[illegible]の海　[illegible]て光景
[illegible]の川　[illegible]
五月雨をあつめてやはや富士川
[illegible]
[illegible]五月雨
[illegible]
入梅さへ[illegible]雨やあらちまれ
[illegible]破
[illegible]の絵
[illegible]
五月雨やかりいと好ふ素よ相

[illegible]川くもり[illegible]の[illegible]事を[illegible]
[illegible]の不二の[illegible]に
[illegible]五月富士
五月の雨風[illegible]に[illegible]大井川の
出[illegible]れ[illegible]て[illegible]
[illegible]
[illegible]八[illegible]人の[illegible]
五月雨の[illegible]
橋山や[illegible]火[illegible]川
[illegible]の光明[illegible]
[illegible]の雨

[illegible]山の松[illegible]みな一里程
[illegible]山の孤[illegible]く里を食時分
[illegible]の物の蜂[illegible]時おくす海苔
子冊[illegible]
[illegible]の蕨を小滝の[illegible]き
童行[illegible]
[illegible]山を出羽の[illegible]
[illegible]の住[illegible]大塩の旅店を訪
[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
正成[illegible]像

鐵舟石心仏人之情
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
清風亭二句
[illegible]
[illegible]
已百亭

やとりきむ藤の枝にあらはれし
黄鶯の如し移ればもとうしなふ
とゝまる悔みて
もろき人にたとへむ世をなげかし
秋神の人をもとゝまるとはいふ
うき秋をさびしがるうんこと
能なりの鐘にしたがはしし
稲荷山うつくしし
雄鶴ひくくしし姿の
三石寺
志賀の寺和尚
学堂迎東

やうて死ぬ事はきハ尺しゝ姿の
鶴三尊の像
女の手をとうしろよりて山里
そもむかしてもまみるあの猫
とゝまる
関扇もて姿の人なしろ白
青香寺
鶴の秋鶴の夜明
鶴の世の鶴の夜明
ひるの夜の夜明
ひるの夜の夜明
ひるの夜の夜明
西田の雪国の海文の志信
ひるの夜の夜明
夜明をしるの床の山

[illegible]の[illegible]や[illegible]を[illegible]の孔
[illegible]千[illegible]あんを[illegible]ひろ
[illegible]人の[illegible]千[illegible]を[illegible]生[illegible]
る古[illegible]を[illegible]
瓜[illegible]る[illegible]あ[illegible]なるのすみ
[illegible]松波[illegible]て[illegible]瓜[illegible]
[illegible]を[illegible]て[illegible]を[illegible]を[illegible]
[illegible]花[illegible]を[illegible]
瓜の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]山の松の下[illegible]て[illegible]の
[illegible]

山[illegible]や[illegible]を[illegible]ん瓜[illegible]
花と[illegible]と一度[illegible]瓜[illegible]
[illegible]
[illegible]千[illegible]瓜の[illegible]
初[illegible]
[illegible]
[illegible]千[illegible]瓜の泥
[illegible]行[illegible]八寸[illegible]
[illegible]
[illegible]千[illegible]割し[illegible]瓜
瓜の[illegible]や[illegible]
[illegible]

夏の秋や蘭に残て冷し酒
さし汐時をしらぬ清水かな

岐阜山を望む

城跡や古井の清水先つむ

飯浜の湧泉

涼しさを絞ふちつゝ同じ石清水
絞ふちつゝ水の園子ひく志ゝかな

浜広二日

月を見て見物しつゝ秋の夜
月を詠んと笛を吹しも浜の夜

吹石秋伯

増賀やさゝつゝみおろすを夏の月
夏を歩ハ鮎子ゆゑ多ゝ月
夏の秋やこゝろゝゆるる石清水
夏の月沖の波ゆゝしき赤坂や

晋の洞明をうらやむ

夏なゝに屋内の蓋や花の むろ
秋野をゝ人の住家ゝ暮ゝ

山を絶をゝ入ゝ入ゝ夏ゝ雪き

井物弐水機

奇の夏や湖ゝ手ゝうふ浪の上

名月ゝ知ゝ彩色ゝふゝものを見
付んと言ゝのみさいゝゝゝれば

人しらぬ山の奥の庵を設け
居をしめけるに
又たらひあらひ御川の手洗鉢
うつゝの面影を浮ぶに物ごとに
枕もとへかよふて忘しき釣舟に
不首尾なる事ありてあるの旅しける古琴
家名を離れて　二句
ひとしほかくる扇や雲の峰
草の露うつす月をかざしや雨の鼻
枝なくて香ずなるかぬ草かな
雲のかゝる川流れて月の山
六月や峰すやれくがし山

夏の月や朝ハ往にけり鯨
清瀬や涙なつむ青松葉
みな月のつく病やみの果てかな
かくれ住ぬ流夜ぬむす秋
松風の落葉のかぎりとすし
石川文山の像
風の渡る朝顔ハ鰊もつるえ花
其声
我落ハ竜もかみくる朝顔かな
小倉山常寂なるとし
松枝をとめてや風の葉する声
雅力亭　二句

さゝなみや風のうちよせおとなる
湖やゆふ月さしを惜むなる峰
松　おとはさゝなみ　なる　この月
秋風や千日の客やゝ弱るなるみ
　滝鳴る
わすれすゝ小和の中山うとすゝ先
　　　

[illegible]海に入るうまのみ川
[illegible]灣や雨[illegible]函館の新ふの花
[illegible]越や[illegible]經めぐれて海深し

[illegible]

きさらぎ[illegible]
花の上こゝ[illegible]
[illegible]の上こゝ[illegible]
[illegible]附滿寺の[illegible]
[illegible]
[illegible]や[illegible]
小[illegible]
川中[illegible]根[illegible]

[illegible]納源[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
川風や[illegible]
如翠亭[illegible]田家納源
[illegible]
[illegible]
[illegible]

野水新雪

[illegible]

東武[illegible]人[illegible]

[illegible]の毛[illegible]

破竹亭

[illegible]

[illegible]

大津木節亭[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三日月や[illegible]の[illegible]の夕[illegible]

月をとゝのへ[illegible]

[illegible]

[illegible]

俊[illegible]す[illegible]月俊[illegible]

[illegible]

六[illegible]の二人[illegible]

古郷の安[illegible]

[illegible]

[illegible]や[illegible]

西[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋のきのやうに戸のくちやうとうとう
うけたまはし水生木やまみち解
武義を素行集を先とし政治
歌道を
名月のあるやうに五十一ヶ條
をしるしと名月の秋や栗の山
孫ゝやはつたまれたる山の月
木を伐るまくはつたるの月
有蘭　草菊　宣止
識之や肩を推すうる元
武義ゝやはつ一寸はれ森の春
義のあるうやはつ秋のくちつし



なるゝぬいろはきうるはしき中ゝ
後京の秋物のはるれをとめうる
京の秋をもるゝ秋のうれ
やのゝやを宮の秋を堺町
茅舎の感
芝蘭ゝゝ鹽を雨を吹ゝ
とうとうとはの尺る芦宮の
ひれとうとゝ牝鹿とうゝ牡鹿
秋ゝ霧を出ハ月下の雲を窮山
風葉すゝる裏遠を秋や秋の雲
秋のうれ男ハ後めものうれハうゝ
花木稀裸意は宮しうの

[illegible]秋や軒端の萩の散らん

重陽

さらつもれ[illegible]ゆく菊や折本を

近江海を[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

真享元禄年中

四季俳諧

秋秋や海も[illegible]の一みとて

[illegible]秋やたくみ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七夕や[illegible]の秋は[illegible]

[illegible]雨星

[illegible]や[illegible]の上

[illegible]寺[illegible]

七夕や秋をさきもるさ[illegible]めの秋

[illegible]麻寺[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]の松

[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

ひやくしと碁をうつとふやうにて座敷にて
碁をこい
稽古をしてもらやみの紙屏風
言数碁
ひけをとらぬ稽古をやめいたりけり
碁盤識のけさまをくるふ稽古大病の墓
とのわいくまうくさ
いかつをうつ情らぬ人のたやすきよ
稽古をやめの碁のかはゆく五位の碁
おのれをうつるおもひ後骨ともの箇結をか
きくを能すうおもと画て兼基の碁
うちうまとに生死のたとえれなり

時雨ひとしきりふるまやかの俳諸を
枕として孤子の寄をわたるなり
もしかけをおもをまさしものし
いふまやかうくの家うすきの徒
よりかに西行庵をたて
寄とくし試手活をすこうをや
画讃
あるりの芝雞をうれ松の家
月良をおろう
ふるうやかを書仕けさむ笠の家
二人の蒲をし
硯うしと拾ふやくはをたのつ西

岩崎嵩八を〻一百蓮華方丈八仙の代り
まの仏〻士峰代と掛て蓬天をお
さえ日月の光を門をひらくのとむ
うふ雲さえ紅おもしろく笑系を変す
詩人と句を画ますす士文人と詩を所
画工と筆を按ずけるに藐姑射
孔巧の神人のうさ共詩をよくきむの
を画をよくきもの
雲雨の時 百家を画てう
霧雨不二を天地をおすの
秋海棠西瓜の花のうを咲てう
玉川のまを手おをもてをを

ひまうくとあの絵かけ一やあ印も
くすし何のうの縁
むう雨を当井うわふく生絵
言上の吟
花をとさ絵木絵をを手吟れう
言田醫師細川青庵尊
茶棚ていう絵のもをを 枕
加賀屋手入
ふ絵のまやをけ入をを絵海
少松をいふ雨をを
ふををき角やふ松〻茶をき
茶屋や一茶をそやをを山の犬

歌小考

めれてゆく人もなつかしや雨の萩

紅の涙

浪の花や小夏ずゝる萩の露

いろの涙

小萩ちるまつ虫の小ひさうき

画讃

ちるあるとこそぬれるかな

ひとりあるまつ虫ゝ萩と月

萩書言葉の花ゆゝるゆゝ

尺ゝ

紙いろやちるまつ虫の萩

敷賀大宗院

門ゝ入ハ萩ハ強ゝ芙蓉ハ匂ひうれ

悦書和尚の詩賛やゝ

ちるを惜ム芙蓉惜ム芙蓉やゝ外

茶店ゝ

芙蓉の花や埼のつゝきに花ゝ

地女の画讃

枝ゝ外ゝ外ゝ芙蓉外

きゝ雨のゝちゝと芙蓉の下ゝ

芙いろゝ外の花ゝ

代寺ゝ一文字のゝ

秋草莽

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]句を書きて遣す

秋のいろ四の味噌蓋にあるうち
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]の国もいづくや音のみ[illegible]
稲すゝめ[illegible]の木たちけや[illegible]
青くてもうつくしきものを蓼 椒
かくさめて柳ちる業汁の[illegible]
丈風[illegible]あり[illegible]
木曽塚の四草[illegible]
[illegible]の戸をきれや[illegible]
椒陰軒
[illegible]柳[illegible]
金昌[illegible]
[illegible]掃[illegible]や[illegible]金 蓼 椒
画賛

[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

高尾根本寺にて二句

月をやし梢を雨と散るなり

寺に寄て寄て鳥なく月夜哉

田かへす二句

蛙のこゑや稲ふとうけて月を尺

いもの葉や月中川里は焼畠

大雲根院光院にて物語

何事ぞ此天色を似たる三日の月

あれ中に多給たる霧の月

蛍狩に

俤や蛍ひとつ流れ月の友

いさよひも雲さ更科の秋うれ

善光寺にて

月うけや四門四宮も出ひとり

仲秋の月を更科の里姥捨山

うつろ物ひとつ月の見もくまれけり

あつく長月十三夜千年の

木立の疲もまつさきぬめ

俤の松をとうとう伝ふ月の庭

清水の鶴を待ぬ月の

と言ふ事とて二条殿さもの

あさむしや月尺の流のゆくえ

月尺さよ玉江の蘆の芽出

湯の尾峠にて

月を名をつゝみこうあるやいとの弥
[illegible]山
義仲の宿営の山の月出て
[illegible]
月清し越前の[illegible]の上
敦賀港
[illegible]月やかゝる[illegible]
[illegible]
月のみる[illegible]角力[illegible]
仲秋の夜つゝの[illegible]の物
[illegible]
[illegible]の[illegible]を入[illegible]

[illegible]
[illegible]
月いりこ[illegible]三河[illegible]海の[illegible]
木因亭
[illegible]れ[illegible]や月と[illegible]と[illegible]国三及
斜嶽亭
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

尺くらゐ経ハ筋の心ゝ浅くして行くあなたの
さの妻鹿を切さく斧をおくけくさし
心たゝ今更丁寧むさ
月さしよりの岩ら出れ嘆き哀
悼を流て宮殿を羽黒をの山の月
先月の妙くさ
遠影
交うけさの月美しく澄みあ
お出の宿さ
ひさしかやあ
既に秋二首

[illegible]
歩くしとおさういさふ月のさ
正覚寺和合
月代や勝手を至高のやと
古寺晩月
月見さる山さ美しき奥さ
月見の徒
米さ友をとよひ月の宮
義仲寺さ
三井さ月門たるやふの月
見月や湖さ月さうふ七小河
名月や吹き寄る姫雲の橋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

清見

[illegible]

[illegible]

[illegible]

川とと此川こいや月の友
いさらひとて川のうの関のとめ
蘭亭初七日詣
尺やそ寺ちいきちめ三りの月
東照宮
入月の行て れの四隅こうき
盛水亭にて
新作や菊のく岳社する豆腐車
伊賀の山中にて
名月の花のうしてて孫とけ
名月て林の寺や田の墨
義出発にて



とと賀路より脇の月も十六里
住吉の市にて
月見てく分ふる月尺うれ
晴正亭題月に送先
月すむや狐 怖うる 先の 俤
女 松亭にて
秋とやそつく事月の新
名月や池をめぐりて松さまう
山寺しかの 庵や月の月
わの物に四角れ新と蛙の月
かけそしや先異しいつ弱もく
桟やいのちをうむ苔のうつ

芳野於泊

雑木ども森をなせる中に竹のつま
高く清きを小斗をいく株うゑ
植ひなむハ春おかの神をきめさせ
給ふ里ら旧里ともし
孫ら や賀をとり慰むかのれく
庭牧唐ゝ
雪植ゝ牛ハ五本のあ一ハ
神の雪のうゑたる雪もものうゑ
雪の葉も常ときしめむる新葉か
思竹ハ寒も雪もかゝもみちか
ゝ神ゝ

清家手を洗ゝ清のふハ何ゝと思ふ手
母の白髪ゝ初のみゝ
まゝゝハ消ん流ゝ切りお秋の雲
初茸やまゝゝ敷強め秋のつ西
松けやゝゝぬ木葉の風ゝ付
松茸やかゝれゝとハ松の新
茸物やあふふれるゝ文明西
給水ふ楚
寒ゝ乃ゝ本の寒茸の寒拾ゝや
木ゝの樣ゝきゝ女の人おち産れ
李白ゝ本の二人子
蒟蒻ゝ柿ゝとうれ き茸の花

氏野亭翠亭

里ちかく柿の木枯れぬ冬ふし
ふる柿や一口ハ喰ふ秋の つる

翠因桑淵亭休亭

祖父と親をるけ爲や梅みのん
梅や 侍 おれ白子の店さしし
何喰さ小家ハ秋の梅 こうけ
秋と 師 家 梅さ ふ矣 や 蔦の 家

草葺の雨

起ゆうる 男 行 の うし ま は ひと

左柳亭ゝ

たやくさりみ ちたつ ー 春の 蔦

蔦 泥 ふ ま ま 蔦 を ま ま き の ふ
就 山 の 家 を ひ ま き ふ を 手 酒 は
飽 れ ま を ま ま 狐 は ま ま れ
と ふ ま 梅 ま ー 酒 手 酒 ま ま ー
ま ま 蔦 ま 我
ひ ま ま ひ の い ま 紙 の ま 鉢 を 張 ま 蔦
山中の温泉ゝ
山中や 蔦 そ た ま ま ぬ 湯 の 白 し
此行亭ゝ
疲 ま の ま ま ま 蔦 の つ ま み ふ
蔦 の ま ま 蔦 て ま ひ ま く ハ め ま こ ふ
因 ま ま 手 ま ま

稲こきの歌

望田の伺うし木院醫師の兄の亭に招
れしにうつる菊と花を酒をもて
みすれる秘業八坂の井筆志ゆき
いと芳しき花八
墻を来て砌もし吸菊の餘の香
九月九日乙州と一樽を携来られ
その夜やりうるくくうたし菊の酒
尺ちかの砌れやのうるむの後の菜
八丁堀にて
菊のもと吸や石屋の石の石の百
大門通りとうてるる



琴の音や古地店の宵戸の音
国女亭にて
きくきくお月さまてえる寒さかな
奈良にて二句
菊の香や奈良うて古寺佛生
きくきくまくや奈良八いく代の男ふり
そこの雪味にて
菊の香のそこうおるる白如
生玉堂にて
菊よりもく奈良と浪花の宵月夜
菊花の賀
おもひ八酬うるる菊のさかりかな

江上の破屋をもるる二日
雨さらさらとふる人の声もなし
秋すでに都て江湖をさすり古び
悔抜き
筋をゆる人抜きて秋の風いのち
義弟のこころ似ふる秋の風
秋風や藪もそよげも不破の関
多子志みく大根すし秋の風
一茶追善
墳くらうけ香炉に秋の風
蓮中
赤しとりてつれなくも秋の風

生涯屋を地の高く秋の風
新会歌
石山のこころ高しし秋の風
猪桃天号
桃の木は紫なれ秋の風
中村をさく
秋の日伊賀お蓮京殺溝し
妹うるの吹しも高し栗の球
中山の銀
ものいへ唇さむし秋の風
芋秋の音きそ
秋風や柳ちるこの芋の雲

伊勢紀行の跋

西東あちこちくれさわがしく秋の風

悼松倉嵐蘭

秋風やものいはぬ人の笑ひ草

野ざらしを心に風のしむ身かな

尺足らぬ袖もかこちぬ秋の風

曲聚亭題板賓

乳飯のかゝ梅賛ずる板賓哉

麻布神前

四方の海生きて代やあの秋

菊苔

ぬるとくおちて米ゝ木苔の秋

さらさらと秋よの秋ちるはひとり蟬

稲の穂ゆれて

さびしさやけさ鳴る滝の秋

白雄養子

旅病や宿借るふ杖の山

小名木川相実無り

秋すゝきゆのくれ事を小松川

旅懷

四方秋ゆくて寺ゆく寺ゆく

車庸亭二句

味の素をと歩崩しゝ喇の孔

ゆくすゑ小松菊ふかくとみくる窮

きりぎりす人しれぬ草の戸やうく朝起ハ
やはし

神もしらぬ秋の名月や寄る雲

本国寺にて

卯の花を如何こゝの冨ら秋のうれ

いく秋しみセやうて開生ゆかれうう

深川の庵

梅の香の庵をうつして秋のうら

枯枝に秋の暮

雪竹の像

こちらもみけ赤きき秋の暮

所思

此花やゆくゝ人をして秋のうら

り秋や分て引まゝ之有嵐赤

哈 ゆ ふ ゝ ゆ ゝ わ ゝ れ ゆ く 秋 そ

内やさハるすきさまうてかやの近言を

をこのみけうて

たゝかゝゝうれ和ひあ沸近言

ゆく秋のあわしやすのすゝ青宮柑

せゝ柏亭うて

秋沸ゝ隙ハ行ゝ秋する人う

清水の家庭ゝ

新風の柳ものうゝ秋うれ

行秋やまゝ庵けうる雲のいの

考證

傳伝曰

[illegible]

書海長元系[illegible]

[illegible]

[illegible]

武義[illegible]の[illegible]の[illegible]松島の[illegible]

[illegible]

[illegible]

現後[illegible]

一草庵の席上饗應[illegible]

[illegible]

孤の絵

米の[illegible]に対して[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

茅舍買水

[illegible]

小[illegible]

[illegible]

[illegible]

山[illegible]

白炭や かの[illegible]

張[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

[illegible]

耕月亭[illegible]

[illegible]

[illegible]

山ゝ猫鼠ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

桐葉のめ[illegible]おのづからされハ[illegible]
と[illegible]あと[illegible]に
[illegible]難[illegible]ん[illegible]月
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]月の[illegible]
[illegible]
人の[illegible]
[illegible]月の[illegible]
[illegible]といふ[illegible]
[illegible]れたくとも[illegible]を

[illegible]おとま[illegible]やた[illegible]
[illegible]人と[illegible]れ[illegible]月
一尾[illegible]
[illegible]
[illegible]月[illegible]
四[illegible]
[illegible]様の[illegible]
[illegible]
[illegible]月[illegible]
[illegible]
[illegible]月の大井川

[illegible]

新稲のむかしのかすとうれしく
山路へ井出のかすとうれしく
[illegible]

人しを明命[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あらぬ[illegible]
世かしらぬ[illegible]や枯木の枝の長
大津をとる
三尺ばかりもあるべし本ばかりの
有の実ときこゆる故照るる松の心
をすかしてく
[illegible]
当寺は[illegible]千年ばかりつまれてよ
既千百年ばかりふるとの和尚豊奉
加の辞は白竹林ひとつ去石光ら
とおもひ[illegible]本を物ゆて[illegible]千
受付[illegible]れハ



百年は[illegible]きを庭の前架ふ
[illegible]千[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]の場のくさみをおろそれよ生[illegible]
[illegible]
[illegible]や田畑のみどり[illegible]
樽七千[illegible]
四里を[illegible]田舎[illegible]
[illegible]人あり家僕[illegible]
[illegible]を[illegible]
奴阿飯の功を[illegible]陶侃の故奴
を[illegible]諸や[illegible]人を[illegible]
物八千[illegible]下位[illegible]
上[illegible]の人[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]後く梅を[illegible]後の[illegible]
[illegible]川亭[illegible]
[illegible]千伊吹を[illegible]
防川亭[illegible]
[illegible]を[illegible]梅[illegible]
越白梅人亭[illegible]
[illegible]仙や白き[illegible]
三[illegible]白雪と[illegible]
[illegible]後の[illegible]
[illegible]白[illegible]梅[illegible]
[illegible]義[illegible]の友や[illegible]

式里を好ひ[illegible]と八幡宮の院の法
門の参詣をまつ紙をもてよりて法
華寺より里人のかう侍るを見き
社文をもてあそぶ[illegible]侍れ
ともいとさのみ[illegible]侍るまに
梅はいとあはれ[illegible]ほのみの里
おもかげ[illegible]花入 松[illegible] 梅はいとあ
[illegible]高や 新[illegible]の[illegible]白のうる
泥下の茶店[illegible]
松茸を焚[illegible]多拭はず宮うゑ
吉田の[illegible]
[illegible]と二人 [illegible]ねたのもき

除[illegible]や[illegible] 入[illegible]新さふき
三河の[illegible]寺[illegible]資[illegible]のおごり[illegible]
[illegible]
松[illegible]ひ[illegible]新[illegible]て[illegible]
李[illegible]の悼
[illegible]
元起和尚[illegible]
[illegible]
[illegible]入[illegible]
仏化り父の追善
[illegible]
法[illegible]の[illegible]魚の店

[illegible]

[illegible]

[illegible]

初雪やまだうぶ毛の残るうな
曽良伺うて八代の方へ近くかくす
屋をとりて初めて詩つくるに
雪ふる初ひとるるとけそ雪ふるそ
たすけとなる茅屋とみるに八十年
杵をたくく惟喬をみる人こそ
市をうるとうるひとを問ふ歌壇
詩仙堂
東吹をしけるに物見をひらけば
初雪や菊冷え初の砌
抱月亭
市人をいつて見る文むる雪の道

やもしらしらまやもやまの雨
杜鵑亭
取はくろ山中の雨き人のてしなと
雪とまるとうるひ沙先の名月
笠松とよ人を問ふしら初の雪
なめつけて雪見に行のる戦場
旅人を見る
うるさく後る雪の初しら
源川八貧の中
米ひとり雪の宿や牧馬中
寒山自画賛
蘆雁亭
雪をわるる第仏

閑屋箴

酒の免いとく飲るよりの空

吟海雅賞言亭

京やしハまるしなやきの雲

熱田海道

慶真寺後ろ清し寺の赤

寺の俗家四と思ひ越人を誘ふ

二人尺ー寺ーも暑ふ

懐住濃羅旅

寺寺や鉢の花の茂の苔の苔の

いきくらハ寺尺ふ特ふ寺寺

山中ふ手作ひて

寺の内千鬼の後れ蝉つる程

元禄己卯奈良大佛再興

きつ寺やいかり大佛お柱立て

初寺や聖小信仏茂のいろ

物のち音の法人とちん寺ふさきを

駐ふ光の後志摩の里千住時

ふして大津松本の方物ふ

夜尾の浮ふ彩ふ物ふ法

出ふ住ふて物ふ

か降の尾仏

御水飛寺

伊良三上寺ふ法の橋

大雲や清くひろく住義の家
三秋を孤さく深門の蚊庵に泊きて
旧友門人多くに杖を曳きて
同じくに住ける
とものくもるやうの松尾芭蕉
ちぢみて玉鉾の道も雲の
小町の画讃
たゆたきやうを海ぬるみのよ空
草庵に士の
本秋の
源川大橋朱鉢
秋雲やうの
橋の上

秋雲や多仙の堂はたてむやて
竹の画讃
あるとみるいは雲の外の雲きか
湖水のうの雲の山きの雲
雲有の清水も武蔵の
和歌の
源川大橋朱鉢
雲のうやいくふむ橋の雲
秋雲のうの竹
かうしとおうつ清し外の雲
去歳四友子を送る論余ておのる
雲を諸々嘆歌ひくを送りく

稽田の雪の夜ふるはしらゆき
かすみ霞山の袖や秋手の雪
ふるさとも雪やまてのと撰て尺し

杜鵑を題に

さみだれ八つて蒸とはれ雲の君
麦生てよそ作ものやさけむ
蕎の葉はれ初めて尺さくらさの雲

少将の一くて樹木起伏るいまのう
いひつのうくもくく

くすくのむさくるくく雲の枕如

吉野山とものひいて
雪のうちまて一と咲る火桶如

ゆくうの雨のおうつおうる火桶えの
かすまをとうしまくくう舟す
埋火もきの用やの伝のみえる初と
きうくくくうまれ雪火焼如
住つのあ部のうくうや雪火焼如
秋うの雪高良の法印うくれ如

出家旅館

埋火や硯をうしまを実のうけ法し
五つむい等のうまを並ふいろれ

夏源氏の鏡

稚ちや一一ぬ箱の如尤仲

十二月九日二井寺にて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

明鏡を出やの
月花の夏年減さん年を入
かゝれらゝ沙毛の御のかゝつゝ
手ゝれぬ笠ゝゝ学難そ紅ゝゝ

自好歳

おゝゝゝ人は数ゝも入れ光の雪

西鶴

ゆく年や油ゝ新は少れゝ
ゝゝゝと手ゝゝ人や古暦
手ゝゝれ三人ゝゝゝ宿ゝれ
煤掃や雪ゆく富の言いき
年の市孫兵ゝゝゝゝゝゝ

月ゝゝゝのさゝゝきし手のゝ
松ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

旅行

煤掃は枝の木ゝ竹ゝ嵐ゝ事
ゝゝゝ紅は初の柄つゝ大工ゝれ

宋雪の句

古伏しや御の陸奥信年の雪
ゆゝ人ゝゝゝゝゝゝ年ゝ雪
行年は河毛の市ゝゆく　移

五百尤元服の行ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
芸雪の本れは風雅ゝ河毛

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] 松高そびえ [illegible]
酒のみ [illegible] 人の絵
月花のもとにて [illegible] 酒のむひとり [illegible]

良源宗[illegible]寺武[illegible]画像

三[illegible]は[illegible]の天[illegible]をうけ [illegible] 心匠を
[illegible] 絵[illegible]
[illegible] 梅や
月花のもとにて [illegible] の [illegible] 遊
[illegible] 先生

四[illegible]の [illegible] 桂の [illegible] 梅 [illegible] 木の
四山の絵
物ひとり [illegible] [illegible] 秋せうれ



布袋画賛

[illegible] ふくろの中は [illegible] と [illegible]

[illegible]

越の [illegible]
[illegible] 高 [illegible]
[illegible] [illegible]
[illegible] [illegible]

画賛

[illegible] 尺 [illegible]
[illegible] 一 [illegible]

和州画洲とゆられい新西の石交手岸
餅花やかさしまさをるよめら来
大事の秋ぬすみよひを
梅干干ものもの実をゆゝ経寄
辛崎松原
琵琶の湖面よ踏ゆる松社律
栗津時雨
さゝ舟や人ぬ波ゝ市の寄
矢橋帰帆
久のゆゝみ赤石ぬ海を帆ぬ寄て
比良暮雪
さゝゝ雪白衣ぬて物波良の雪

石山秋月
波やゝの面ゆゝ月波秋の月
澄ぬ夕照
ゆゝらゝかゝのぬ鏡ぬ寄鏡
堅田落雁
ゝゝの文かゝゝゝ方ゝ夜宜
三井晩鐘
ゝゝ江ゝゝれハ一花ぬ種
右八景八宗房の時の詠ゝと云
九のゝゝ社寺秋市中ゝ住ゝひゝ居を
源川の寄ゝに縁ゝ安ゝ寄名利ぬ

世をすてしさとをたものハ行路うらゝ
いひけん人のかゝるを見侍るハ氏なのともき
あくれ

実の戸をもの家をも市紫うく栄くの毛
清忠

三十里尾張大根のさかりこのれ
画数

たのむらよ富風なれの秋の残念
けしの家子蒙るる寺の小舟の裏
葦るふつて

深川や松らの昔恵をこのこひ
阪中をるる島さしこもの魂され



ふるふる芭蕉庵を造ていとゝみゝ
ゆゝ秋芋の味分ハるの　古　柏

九冊内
寄合衆